

(PDF版・4の1)『教会教義学 神論Ⅰ／1 神の認識』「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」「二 人間の用意」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」「二 人間の用意」(232-325頁)

「二 人間の用意」

『自然』神学の生命力を問う問いの四番目の探究は、一つの独立した枠の中に(中略)……換言すれば〔先行する「神の用意」に対して「その後が続いて」後続して行くべき〕<人間>の用意として理解されなければならない神の認識可能性を問う問いの探究の中に含まれていなければならない。詳しく言えば、キリスト復活から復活されたキリストの再臨(終末、「完成」)までの聖霊の時代、中間時において、第三の形態の神の言葉である教会(すべての成員)における一つの「補助的機能」(「教会的な補助的奉仕」としての神学は、「言葉を与える主は、同時に信仰を与える主である」ことからして、そしてIコリント3章、エフェソ2・11-22からして、神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的な「存在的なく必然性」——すなわち、客観的なその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」<と>その中での主観的側面としての主観的な「認識的なく必然性」——すなわち、その「出来事の中での主観的側面」としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」・「キリストの霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」を前提条件とするところの、主観的な「認識的なくラチオ性」——すなわち、徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性を包括した客観的な「存在的なくラチオ性」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の第二の存在の仕方における神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉(「最初の起源的な支配的なくしるし」)であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」(換言すれば、聖霊自身の業である「啓示されてあること」、「キリスト教に固有な」類と歴史性、「聖礼典的な實在」)の関係と構造(秩序性)におけるその「最初の直接的な第一の啓示ないし和解の概念の實在」としての第二の形態の神の言葉(その最初の直接的な第一の「啓示のくしるし」)である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、聖書に対する他律的服従とそのことに対する決断と態度という自律的服従との全体性において、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあつての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」(換言すれば、「教えの純粋さを問う」<教会>教義学の問題、<福音主義的な>教義学の間

題) <と>、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」(換言すれば、区別を包括した単一性において、<教会>教義学に包括された「正しい行為を問う」特別的な神学的倫理学の問題、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、すなわち全世界としての教会自身と世のすべての人々が純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え) という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行くべき「人間の用意」の問題を明確に提起しなければならない。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての『**神は、認識可能である**』ということは、[前述したように、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が……啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>を持っていることからして]『**神は認識されることができ**』ということの意味している。「まさにここでただ一つそれだけが問題となることができる[先行する]<神の>用意の中に、[後続する]人間の用意が<含まれて>いるのである。神が[先行して]われわれによって認識されるべくご自身で用意して貰うということと共に、またそのことの中で、人間も[「その後が続いて」後続して]神を認識すべく用意ができているのである」、「あくまでも[先行する]神の用意によって包まれ・基礎づけられ・限界づけられ・規定されつつ、それであるから決して独立した仕方ではなく、間接的に[すなわち、あくまでも先行する]神の用意の後に従いつつ、[先行する]神の用意を通して、無から存在へと、死から生命へと呼び出されつつ、徹頭徹尾[先行する]神ご自身からして、神ご自身による、神の認識可能性に依存しつつ、まさにこの徹底した依存性の中で、そもそも被造物が神との関係の中であることができる限り、現実の仕方で[すなわち、客観的な「存在的なく必然性>」<と>その中で主観的側面としての主観的な「認識的なく必然性>」を前提条件とするところの、客観的な「存在的なくラチオ性>」<と>その中で主観的側面としての主観的な「認識的なくラチオ性>」に基づく仕方で、あの「神への愛」<と>「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において)、[第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての]神を認識しようとする人間の用意が存在するのである。「この枠の中」からの逸脱において、換言すれば「神認識に対する人間の用意の問題」を明確に提起することができない度合いに応じて、「<『自然』神学>の現象」が起こって来る。すなわち、「すべての『自然』神学」は、「神認識に対する人間の用意の問題」を、「人間の用意を独立した要因にまで高め、[それ故に、人間の用意を]……徹頭徹尾[先行する]神の用意に依存しているとして理解し<ない>仕方で、理解するのである」、ちょうど「宗教とは、すべての神崇拜の本質的なものが人間の道徳性にあるとするような信仰であるとしたカントは、本源的であるゆえに、すでに前もってわれわれの理性

に内在している神概念の再想起としての神認識という点で〔換言すれば、生来的な自然的な類的機能を持つわれわれ人間の自由な自己意識・理性・思惟によって対象化され客体化されたわれわれ人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」概念)の再想起としての神認識という点で〕、アウグスティヌスの教説と一致するように(『カント』)。「すべての『自然』神学」は、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の特別「啓示の中での神認識の可能性と並んで、〔それとは独立した〕<第二のほかのところ>基礎づけられた神の認識可能性を主張するという仕方で行きわたるのである」、「それは、神の啓示を説明するという課題のほかに、それと並ぶ〔それから独立した〕もう一つ『別な』神学の課題について語るのである」、ちょうど神学には人間学が必要である、また近代的な人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍が必要であるというように。

われわれは、そのような「『自然』神学の<取り組み方>を拒否しなければならない」が、しかし、そのような「『自然』神学の問題」は、生来的な自然的なわれわれ人間の自由な自己意識・理性・思惟が類的機能(無限性)を持っていることからして、人間の自然必然性に属していることからして、それを「拒否することはできない」>。したがって、それが人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、われわれは、「教義学的な合理主義を明確に否定する」という自らの立場において、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の特別啓示、啓示の真理、「恵みの類比」(啓示の類比、信仰の類比、関係の類比)、啓示神学という自らの立場において、それを根本的に原理的に包括し止揚し克服するという仕方で行きわたるか、それから対象的になって距離を取るという仕方で行きわたるか、「『自然』神学」の<段階>から「『<非>自然』な神学」の<段階>へと移行することはできない。

先行する「神の用意の中に含まれた〔後続する〕人間の用意は、明らかに恵みに対する人間の用意でなければならない」——このことは、「明らかに〔人間に対し神が……全く神の固有な力に基づいて開いてい給う〕という〕恵みに対し人間が受け入れる用意があること、その恵みに対し<人間が開いていること>を意味している」。したがって、先行する「神の用意」に包摂された後続する「人間の用意」ができているところの、「人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一」(『ローマ書』)であり、「永遠の(神との人間の)和解」(神の側からする神の人間との架橋)であり、「神との間の平和」(ローマ五・一)であり、それ故に神の認識可能性である「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な(それ故に、完全に自由な)聖性・秘義性・隠蔽性において存在している(それ故に、ここにおいては、われわれは

神の不把握性の下にある)「父なる名の<内>三位一体的特殊性」・「神の<内>三位一体的父の名」・「三位相互<内在性>」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方(性質・働き・業・行為・行動、外在本質、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事<全体>)における第二の存在の仕方(子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事)、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神(「神の顕現」)にしてまことの人間(第二の存在の仕方における言葉の「受肉」、「神の隠蔽」、「神の自己卑下と自己疎外化」、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの<名>」)——このイエス・キリストにおいて、「神の用意の中に含まれて、[それが人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、われわれ]人間にとって、神に向かつての、したがって神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕に向かつての人間の用意が存在する」ことからして、換言すればイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が…啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>を持っていることからして、われわれ人間は、後続して、その<総体的構造>に基づいて、あの「神への愛」<と>「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行くことを意味している。したがってまた、「人は、この開いていることについてさらに記述を進めながら三重のことを区別することができる」。すなわち、「**先ず第一に**、〔言葉を与える主は、同時に信仰を与える主である〕ことからして、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>という先行する神の〕「**恵みのこの奇蹟の中で認識可能となるほかは、神は人間にとって認識可能となることはない**」ことからして、「人間は、神を認識することなしにも、よいということはありませんであろう」し、「人間は、神の恵みなしに、神をよく認識することはできないであろう」ことからして、) **恵みのこの奇蹟に向かつて人間が<欠乏を感じている姿>が必要である**。「**第二に**、神の恵みに対して人間が開いていることには、特定の<認識>——すなわち、「欠乏を感じているという姿が明らかとなつて来ないところ、そこではまた神の恵みも明らかとなつて来ないであろう」し、「神の恵みを見ることなしに、誰も自分が欠乏している姿を見てとることはできないであろう」ことからして、「この二重の意味で〔それが人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、生来的な自然的な人間における〕**欠乏を感じている姿についての認識**<と>それから〔イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自

己証明能力」の〈総体的構造〉という] 神の恵みが客観的に現実であるという認識が含まれている。「第三に、神の恵みに対して人間が開いていることには、人間の欠乏している姿の故に神の恵みをすすんで受け入れようとする人間の主観的なく乗り気>、……換言すれば神を認識することができない〔生来的な自然的な〕人間の無能力に対する解答として、……恵みの奇蹟を避けようとししないで、あくまで恵みの奇蹟を堅くって離さないでいようとする乗り気が含まれている。「神認識がまさに神の恵みである時、……人間にとって神の認識可能性」は、それら相互規定的な「神の恵みに対し人間が欠乏している姿、神の恵みについての人間の認識、神の恵みをすすんで受け入れようとする人間の乗り気から成り立っている〔すなわち、区別を包括した単一性におけるそれら「三重の前提が満たされる」ことから成り立っている〕」。

そのような訳で、「神が認識され得るところ、したがって〔先行する〕神ご自身の用意の中に含まれられながら、それに対応する人間の用意があるところ〔すなわち、先行する神の「後に続いて」後続して行く人間の用意があるところ〕、そこでは、必然的に、いわば不可欠条件として、今記述された意味で人間が開いていることがあるということは、当然のことながら全く正しいことである」が、しかし、「開いていること自体は、それとしてまだ、〔前段で述べた区別を包括した単一性におけるあれら「三重の前提が満たされる」ことから成り立っている〕あの人間の用意ではない」。何故ならば、「この人間が開いていること自体は、ただそれだけとしては、〔ただ単に自分は心を開いていると口述し記述しているだけでは〕……事実、人間が〔先行する〕神の用意に向かって、〔包括的に言えば、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力に信頼する」ことをしないところで、それ故にその〈総体的構造〉に信頼しないところで、それ故にまたその〈総体的構造〉に基づいてあの「神への愛」〈と〉「神への愛」を根拠とする「神の讃美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指さないところで、すなわち包括的に言えば『自然』神学」の〈段階〉で停滞し思惟し語るところで、] 完全に心を閉ざしている閉鎖性の中で起こることがあり得るであろう」からである。このような訳で、「……人間の最も深い本来的な欠乏した姿は、〔生来的な自然的なわれわれ人間の自由な自己意識・理性・思惟が類的機能（無限性）を持っていることからして〕……神の恵みなしにも存在することができ、あるいはまた自分で自分に神の恵みを与えることができる富んだ者であり、そのような富んだ者であることができるということ〔認識〕から成り立っている。「人間は、その客観的な不幸の中で、常にいたるところ、あの富んだ人間の役割を演じている」のであるが、しかし、「まさにこの役割を演じつつ、〔先行する神に対して「その後続いて」後続すべき〕人間は、神の用意に対して、必然的に心を閉ざしてしまう……」のである。「確かに人間が欠乏した姿の中で神の恵みの真理が、また神の恵

みの光の中で人間自身の欠乏した姿が、人間にとって洞察されるものとなることができる」のであるが、しかし、「人間がその欠乏した姿の〈認識〉と神の恵みの〈認識〉を認識する時、そのことは、何を意味するができ、何を意味するであろうか」。そこにおいても、「人間の最大の乗り気も、それだけでは、生涯を通して、……実際に彼によって〔主観的に〕認識された人間の欠乏した姿と神の恵みの弁証法に身を委ねようとする彼の用意」しか意味することはできない、「彼の意志の乗り気は、その弁証法の宿命的な循環を打ち破ることはできない……」。何故ならば、その「彼の意志の乗り気」は、前段で述べた、区別を包括した単一性におけるあれら「三重の前提が満たされる」ことから成り立っていないからである。そこにおいては、先行する神の恵みに包括された後続する人間の用意という観点、先行するイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉という観点——すなわち、神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的な「存在的なく必然性〉〈と〉その中での主観的側面としての主観的な「認識的なく必然性〉」を前提条件とするところの、客観的な「存在的なくラチオ性〉〈と〉その中での主観的側面としての主観的な「認識的なくラチオ性〉」という観点、その〈総体的構造〉に基づいたあの「神への愛」〈と〉「神への愛」を根拠とする「神の讃美」としての「隣人愛」という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行くという観点が不在であるからである。したがって、そこにおいては、「いずれにしても彼の乗り気にも拘わらず、彼の乗り気の故に、〔先行する〕神の用意に対して、依然として彼は心を閉ざしたままである……」。このような訳で、「人間的に開いていることについての表象や概念をいくら分析してみても、われわれは、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての〕神を認識しようとする人間の実際の用意に対して、ほんの少しでも近づきはしなかった」し、近づきはしないのである。われわれは、「人間が心を開いていること自体は、それとしては、ただ単に〔先行する〕神の用意に対して〔後続すべき〕彼自身が心を閉ざしていること・用意ができていないこと、したがってただ単に……神の認識不可能性を意味することができるだけであるというだけでなく、事実、実際に神の認識不可能性を意味することができるだけであるということに会う」のである。したがって、「われわれに対して、そこで〔先行する〕神の側からの用意の中に含まれつつ、〔それが人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、生来的な自然的な〕〈人間〉の側で出会うことに関しては、われわれは、必然的にただ『不服従の中に』（ローマ一・三二）閉じ込められているというあの閉鎖性のことを考えることができるだけである……」。